

第二次世界大戦下における子どもの生活時間調査 —1940年代日本における子ども調査の研究(5)—

高島 秀樹

目次

はじめに

1. 『児童生活の實態』

- (1) 調査の主体
- (2) 調査の目的
- (3) 調査の概要
 - 1) 報告書の概要
 - 2) 調査研究担当者

2. 第二次世界大戦下における子どもの生活時間

- (1) 生活時間調査の意義
 - 1) 子どもの生活実態把握の意義
 - 2) 子どもの生活実態把握の实践的意義
- (2) 調査の基礎的枠組み
- (3) 調査対象と調査方法
 - 1) 調査対象
 - 2) 調査方法
- (4) 子どもの生活時間
 - 調査結果から—
 - 1) 生活内容把握の枠組み
 - 2) 生活内容の一般性
 - 3) 生活内容の時間量
 - 4) 時間的布置
 - 5) 児童生活の構造の概念

3. 『児童生活の實態』の位置づけ

おわりに

はじめに

本稿を含む一連の論考の基本的な研究目的は、1940年代（昭和10年代後半～昭和20年代前半）に日本で実施された子どもを対象とする調査について明らかにすることであり、さらにそれを通じて次の3点について検討することを目的としている。

その第1は、1940年代の日本の子ども、子どもの生活実態、子どもの置かれていた状況について解明することである。

その第2は、1940年代に実施された子ども調査の目的を明らかにし、そこに込められた調査実施主体の意図、その背後に存在する子どもに対する政策主体の持つ政策的意図を解明することである。

その第3は、1940年代前半（昭和10年代後半）の教育調査について実証的な検討を加えて、従来教育調査を実施することが困難で、調査成果が十分ないと一般的に理解されている時期における調査研究の実態を解明し、日本の教育調査の歴史の一時期に関して正当な理解を得ることである¹⁾。

このような一連の論考の研究目的の下で、(1)では1940年代までの日本における教育調査の歴史、1940年代、特に1940年代前半（昭和10年代後半）の子どもを取り巻く状況、1940年代前半（昭和10年代後半）の日本における子ども調査の概況について前提的な考察を行なった。(2)からは具体的な調査の検討を開始し、(2)では青木誠四郎編『青少年社会生活の研究』（日本青少年教育研究所 研究報告）1942（昭和17）年、朝倉書店刊を、(3)では教育研究同志会『学童の生活調査』1942（昭和17）年、同会事務局刊を、前稿(4)では東京府内政部社会教育課『少国民生活調査報告』（社会教育資料）1943（昭和18）年3月、同課刊を取りあげ、いずれの論稿においても各々の調査について明らかにした上で、上記3点について検討した²⁾。

一連の論考の第5回にあたる本稿では日本青少年教育研究所の所員が1942（昭和17）年春から実施した調査研究の結果を収録した『児童生活の実態』（日本青少年教育研究所 研究報告）1943（昭和18）年11月、朝倉書店刊を取りあげ、この調査について明らかにした上で、上記3点について検討することを研究目的とする。なお、第1の研究目的である子どもの生活実態を明らかにすることについては、本報告書は「第一篇 児童生活の内容とその時間的布置」「第二篇 児童の遊びの時間特にその集団性について」「第三篇 児童の道徳生活」の三篇からなるが、紙数の関係から全領域について取りあげることはできないため、第二次世界大戦下の児童の生活実態の全体像を量的側面からではあるが最も良く示しているものとして生活時間の実態について明らかにしていくこととする。

この調査報告書は、1983（昭和58）年6月に児童問題史研究会監修『日本児童問題文献選集』12に復刻・収録され、収録にあたって窪田暎子（東京都立大学教授：刊行当時）による解説が付されており、本稿作成に示唆を受けたこと、必要な場合は引用させていただくことを明記する。

1. 『児童生活の實態』

(1) 調査の主体

本調査の実施主体は「日本青少年教育研究所」であり、先に本稿(2)で取りあげた『青少年社会生活の研究』の調査主体と同じである。この研究所の概要は本稿(2)に示しており、重複を避けるために説明を簡略化するが、この研究所は1941(昭和16)年に設立されたものであり、その「目的」は『規約』によれば「本研究soハ青少年教育ニ關スル調査研究ヲ行ヒ我國青少年運動ノ正常ナル發達ニ貢獻スルヲ以テ目的トス」(第二條)とされ、「事業」は「本研究soハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ／一、青少年ニ關スル研究調査／二、研究調査ノ發表」(第三條)とされている。研究所の役員は下記の通りであるが、陸軍と旧来の社会教育・青少年教育の研究者・実践者を中心的な構成員として設立されたものととらえられる。

所長	陸軍大將	鈴木 孝雄
理事長		關屋 龍吉
常任理事		大沼 直輔
理事		大島 正徳
	男爵	井田 磐楠
		熊谷辰次郎
	伯爵	松平 直富
		小林順一郎
	陸軍少將	青木 敬一
		青木誠四郎
	陸軍中將	鈴木 春松
監事		賀來佐賀太郎 ³⁾

なお、本調査の実施者名は明記されていないが、報告書の執筆者名として第一篇は青木誠四郎(理事・研究部長)と坪井敏男(所員)、第二篇は青木と東郷富久子(助手)、第三篇は青木と福光秋子(助手)の連名が記されている

(2) 調査の目的

日本青少年教育研究所の『規約』に記された目的は前述のとおりであるが、さらにそれを具体化した説明として本調査報告書の巻末に付記された「日本青少年教育研究所設立の趣旨」においては、当時の子ども、子どもを取り巻く状況について、①国家の明日を担う青少年教育の重要性、②国民学校令の施行・青年学校義務化の実施に代表される学制の改革、③青少年団体の統合、④青少年錬成に関する理論や方法の未確立、⑤学校と青少年団体間の関係の未整備、という現状認識と課題を示

した上で、「青少年教育に関する基礎の確立せざる」ことを最も基本的な問題として示している。このような認識にもとづいて、研究所の目的を「本研究所は以上の實情に鑑み我國青少年運動の眞のあるべき姿に關し、同志相集り、捉はれざる立場に於て十分なる研究討議を遂げ、以て我國青少年運動の確固たる基礎を見出し、青少年運動の正常にして健全なる發展に寄與せんことを期するものである。」⁴⁾と示している。これらの考え方は本調査研究の目的の基礎にあるものと理解される。

その上で本調査研究に限定してみるならば、研究所長である鈴木孝雄が記した「序」には本調査研究の目的が次のように記されている。

決戦下青少年錬成の意義愈々重大を加ふるとき、その一翼を擔ふ青少年團の訓練もまたその任益々重きを痛感するのであるが、この時にあたつて少年團訓練の基礎研究たる本書を公にし得ることは余の甚だ欣快とするところである。

本書は昨春以來、本研究所に於て所員の勞作に成る兒童についての研究を蒐録したものであるが、まづ兒童の二十四時間にわたる生活がいかなる内容を持ち、それ等がいかなる時間的な構造をもつかについて明かにし、依つて以て少年團訓練が兒童生活に於ていかなる位置を持つべきかに就て示すところあらんとしている。次にこれ等の生活内容として最も重要なる遊びの生活についてその實狀を觀察し、殊にその集團の形態の如何を究めて、少年團訓練の組織、内容についての示唆を與へ、更に兒童の道德的發展についてその實態を明かにし、校外生活のこれに於ける重要性に關してその證績を示してゐる。いづれも少國民の校外生活訓練について示唆するところ多きものである。

讀者各位におかれては、これに依つて兒童がいかなる生活實態をもつかを知られ、少年團訓練の組織内容の如何にあるべきかについて十分考慮(ママ)にせられんことを希望にたえない⁵⁾。

この序文に見る限りにおいては、この研究所の『規約』第2條に掲げる「…(略)…本研究所ハ青少年教育ニ關スル調査研究ヲ行ヒ我國青少年運動ノ正常ナル發達ニ貢獻スルヲ以テ目的トス」という目的に沿った調査研究であること、具体的には少年團訓練のあり方を考える基礎として兒童の生活實態、遊び、道德性の發達について明らかにすることを調査研究の目的としていると理解される。

(3) 調査の概要

1) 報告書の概要

本調査研究は序文に示されているように3種の調査から構成されているが、その概要を明らかにするために本報告書の目次を示すと次のとおりである。

第一篇 兒童生活の内容とその時間的布置

一 兒童生活の實態

- 二 調査の方法と条件
 - 三 児童の生活内容とその一般性
 - 四 生活内容の時間量について
 - 五 生活内容の時間的布置
 - 六 児童生活の構造の概観
- 第二篇 児童の遊びの生活特にその集團性について
- 一 遊びと児童生活
 - 二 調査の方法と条件
 - 三 児童の遊びの形態について
 - 四 児童の遊びと遊具
 - 五 児童の遊びの場所について
 - 六 児童の遊びの集團構成について
 - 七 児童の遊びの生活の一般的傾向及その指導への示唆
- 第三篇 児童の道徳生活
- 一 児童の道徳性
 - 二 研究の方法とその条件
 - 三 児童の悪への反省
 - 四 児童の善⁶⁾

2) 調査研究担当者

このような規模の調査を実施するためには多くの担当者に関わる必要があると考えられるが、本報告書には先に記したように各篇ごとに執筆者名は記載されているが、調査実施者名は記されていない。先に引用した「序」に「所員の勞作」と記されているところを見ると所員が調査実施にあたったと考えられるが、先に取りあげた『學童の生活調査』や『少國民生活調査報告』では国民学校教員が調査実施を担当していることが記されており、調査規模や調査対象から本調査においても同様の協力が行われたのではないかと推測できるが、この点については同じ日本青少年教育研究所による『青少年社會生活の研究』と同様に明記されておらず、確認することができない。各篇の筆頭著者として記されている青木誠四郎（1894（明治27）年～1956（昭和31）年）は児童心理学・教育心理学者、東京帝国大学文学部心理学科卒業、戦前は大学等の教員を務めたほか、ここに取りあげた日本青少年研究所の理事・研究部長などを務め、戦後は文部省（当時）教材研究課長、東京家政大学教授・学長などを務めた。児童・児童心理学以外に青年心理学の研究もすすめ、『青年の心理（児童教育講座）』1935（昭和10）年、叢文閣刊（『近代日本青年教育叢書』第1期・第9巻、1990（平成2）年、日本図書センター刊に収録）、『改訂青年心理学』1948（昭和23）年、朝倉書店刊などの著書もある。なお、坪井敏男、東郷富久子、福光秋子については現時点ではその詳細について把握することができていない。

2. 第二次世界大戦下における子どもの生活時間

(1) 生活時間調査の意義

1) 子どもの生活実態把握の意義

子どもの生活時間調査の意義についての本調査研究担当者の考えは「一 児童生活の実態」において説明されている。そこでは、それまでの子どもの生活についての調査研究の傾向について、「それは児童の生活活動の一瞬時的なものと云つて見ることのできる生活の場での横斷的な構造であつたと云はれるであらう。」と一時点における実態把握にとどまる傾向が強かつたこと、また、「更にまたそれが一横斷面と云ふのでなく、そこに發達的な追究が見られる場合に於てもそれ等はいづれも文脈を分けて思考とか、運動とか、情緒とか、或は遊びとか、學習とか云つたそれぞれのはたらきがいかに年齢を追つて變化するかを把えて、それによつて發展の経過を明かにしようと努力し來つたのであつた。」と個別の領域の把握にとどまる傾向が強かつたことの2点を示している。それ故、それまでの調査研究では「…(略)…児童生活の全體について知らうとするものにとつては、それはいはゞ分析され抽象された生活の縦、横の一斷面を示すものでしかないと云う憾みがなかつたであらうか。」と一定の「限界」が存在しているとの考えを示している。

そのうえで「児童の生活はそれより更に生きたものであり、具體的なもので、児童生活の全貌を示すものが何か他に見出されるのではないかと云ふ望みをもたなかつたであらうか。」と問題提起を行ない、この問題提起に対して「このやうに考へたとき、わたくし達は以上のやうな児童の生活内容の心理的機構を見その發展を見る前に、もつと外觀的具體的な児童の生活そのもの、全貌を示すものを見ようとする衝動にかられる。そういつた心の動きの前に見られる児童の生活は何であるかと云へば、それはさまざまな生活内容が一つの時間的布置を以て児童の全生活を構造してゐると云ふ事實である。児童の具體的な生活は、一つの時間的な流れのうちに、さまざまな生活内容が相聯關して一つの體系をなして營まれてゐるのである。この生活内容の時間的體系において児童の生活の全貌が見られるのである。」と子どもの生活時間調査によって、その生活の全体系を把握することの必要性、意味を示している。更に、そのような把握が「いまこのやうな児童生活の全貌を見るときわたくし達がこれまで把えて來た生活の一つ一つの内容は、そこに一つの位地を占めてゐるのが見られるのであつて、云つて見ればこの位地に於てその生活内容の児童生活での意味を見出すことができるのである。」という子どもの生活実態を全体として把握すること、それができれば個々の生活内容についての理解も深めることができるという、本調査研究とその基礎となる考え方の持つ意義を説明している⁷⁾。

2) 子どもの生活実態把握の實踐的意義

本調査研究の實踐的な意義については「…(略)…かゝる生活實態を究めることは、児童の練成と云ふ教育の實際にとつていかなる寄與をなし得るであらうか。」として、「おもふに、児童生活の内容をなす諸々の文脈の一つ一つについてその機構を窺ひ知することは、その生活の構造の變化を誘導する基礎を與へるものとして必須の意味を

有つてゐる。」「殊に児童生活の^(ママ)練成に於ては、ある一つの生活活動を指導すると云ふのではなく、その全生活を錬成することを意としなくてはならないのであるから、そこで、まづ明かにせられなくてはならないのは、この全生活の姿である。即ち錬成はこの児童生活の全貌にまづ着眼し、その生活の正しい姿を形成することを意圖しなくてはならないのである。そしてまたこの全生活の錬成に於てそこに重要な意味をもつ内容について重きをおかなくてはならぬのである。」⁸⁾と説明している。

調査研究担当者は子どもの錬成は子どもの生活全体にかかわる働きかけであり、そのためには生活時間調査を実施して子どもの生活の全体像を明らかにする必要があること、さらに子どもの全生活の実態を把握することによっていずれの分野を中心として錬成の働きかけをするべきかの示唆が得られると、生活時間調査の実践的意義を説明している。

(2) 調査の基礎的枠組み

子どもの生活実態を総合的に把握しようとするこの調査においては、調査研究者は①子どもの生活の中にどのような生活内容が包含されているか、②子どもの生活における一つ一つの生活内容の重要性・意味、③一日の生活における一つ一つの生活内容の時間的布置、の3点を明らかにすることを目的として調査の基礎的枠組みが設定されている⁹⁾。

このような基礎的枠組みによって調査研究を実施したことによって、調査研究者は「…(略)…わが國の児童がその日頃、どのやうな生活を経過してゐるかを示すものであり、更には、そこにどのやうな生活内容が營まれてゐるかを明かにし、いはゞわが國の児童がどのような全貌をもつてその生活をしてをみるのかに、幾分とも近づくことはできたかと思はれる。」¹⁰⁾と自己評価をしている。

(3) 調査対象と調査方法

1) 調査対象

本書に収録された3調査においては、いずれにおいても生活環境の違いによる影響を明らかにするために性格の異なる複数の地域社会を対象としているという点では共通しているが、対象地域社会の選択は異なり、生活時間調査と遊び調査においては農村地域社会、都市商工業地域社会、都市住宅地域社会の3地域社会、道徳性調査では山村地域社会と都市地域社会の2地域社会を取りあげている。生活時間調査と遊び調査は具体的な調査対象地域社会も共通しており、農村の代表的なものとして「千葉縣の某々農村ニヶ村」、都市商工業地区の代表として「東京下町の某國民學校二校」、都市住宅地区の代表として「東京山手の某々國民學校二校」¹¹⁾を対象としたと記されているが、具体的な地名・校名は記載されていない。また年齢の違いが生活内容の時間的布置に影響すると考え、各校の「初等四年、六年及高等科二年

の児童」を対象とし、男女別、平日（本報告書では「週日」と表記されている）・休日別に集計しているが、生活時間調査の回答者数は次の表1. のとおりである。

表1. 調査回答者数 (単位：人)

		週日			休日		
		農村	都市山手	都市下町	農村	都市山手	都市下町
男	4年	77	49	45	63	50	46
	6年	79	63	56	80	64	57
	高等科	101	37	56	93	36	56
	計	257	149	157	236	150	159
女	4年	58	65	34	48	70	50
	6年	82	47	49	80	49	49
	高等科	83	44	60	78	41	60
	計	223	156	143	206	160	159
総計		480	305	300	442	310	318

出典：日本青少年教育研究所『児童生活の實態』1943（昭和18）年、15頁
 注：本文9～10頁に示された人数と本表の人数の間には若干の齟齬がある。

2) 調査方法

調査方法は3種の調査によって異なるが、生活時間調査においては「…（略）…児童がその生活をありのままになした後、予告なくしてそれをその翌日回想させてその記録をさせる方法をとつた。」とされ、「この方法は、児童の生活に作爲を生ぜしめない。また昨日の生活を回想せしめるのであるから、その日の生活を就寝時に回想して記録するのとしかく異ならないとも云はれよう。」とこの方法を採用した理由が示されている。調査の実施時期については「児童生活の一般を窺い知る」ために「…（略）…できるだけ代表的な日を選ばなくてはならない。」として、「その意味で、この生活記録は日曜と週日とを選び、晴天の日を選び、十月初旬の最も平常な生活をしてゐる時を選んでこれを行つた。」¹²⁾と示されている。記録用紙の一部は報告書の中で次のように例示されている。

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32			
時刻	朝、起きた	朝の御飯を食べた	学校に行くために家を出た	学校で勉強をした	学校の御飯を食べた	家に帰るために学校を出た	家についた	風呂に入つた	夕食を食べた	寝床に入つた	眠つた時間（その前の晩からこの朝まで）	学校以外のところで勉強をした	お稽古事をした（生花や琴など）	家の手傳をした	家のことを手傳つた	家の仕事を手傳つた	子守をした	買物をした	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ	遊んだ		
0.30																																			
1																																			
1.30																																			
2																																			

図1. 記録用紙の一部
 出典：表1. と同じ、8頁

(4) 子どもの生活時間

—調査結果から—

1) 生活内容把握の枠組み

本稿2.(2)に示したように本調査研究では子どもの生活時間について①生活内容、②生活内容の重要性・意味、③生活内容の時間的布置の3点を明らかにすることを目的としているが、第一に生活内容についての調査研究結果を取りあげている。本調査研究においては子どもの生活内容を次の3種類に分類して把握している。

- ① 児童の生理的な要求によって営まれる生活内容…例：食事、睡眠など
- ② 児童の心理的な要求から生れる生活内容…例：読書、遊び、ラジオの聴取など
- ③ 成人の児童に対する要求によって営まれる生活内容…例：手伝い、予習・復習など

子どもの生活に対してこのような3要求があって、それらの働きかけの結果として全体としての生活が形成されていること、生活内容の布置はこれら3要求水準の全体的な均衡の上に形成されていると把握するという枠組みが示されている。具体的には、これらの内容が児童の生活においてどのような重さを持って包含されているかをあきらかにするために、①その各々が児童の生活にどの程度の一般性を持っているか、すなわちその各々を実施した児童の比率、②その各々が一日の生活の中でどの程度の時間量を持っているか、すなわちその各々を実施した児童がそれによどの程度の時間を費やしているか、の2点から明らかにする必要があるとし、この考え方に沿って以下で調査結果を集計・分析して示している。¹³⁾

2) 生活内容の一般性

生活内容の一般性について明らかにするために、平日にその各々を実施した児童の比率を男女別・地域別に示すと、次の表2.のとおりである。

表2. 生活内容の一般性 (平日：男女別・地域別)

(単位：%)

	男女別		地域別			計
	男	女	農村	山手	下町	
家の手傳	79.2	90.5	91.8	73.6	84.4	84.5
遊 び	77.3	69.0	60.4	80.6	87.3	73.5
豫習・復習	60.5	73.5	64.1	76.4	58.4	66.7
読 書	67.8	63.2	64.4	68.5	64.9	65.6
ラジオ聴取			37.1	55.1	48.3	

出典：表1.と同じ、15～17頁から抽出・作表

注：平日のラジオ聴取は全体で45%と少ないためか、男女別・計は記載されていない。

このような調査結果から調査研究担当者は男女別の特色については、女兒の生活は成人の児童に対する要求を中心として営まれている傾向が強く、男児の生活は児童自身の要求を中心として営まれている傾向が強いと指摘している。また地域別の特色については、①成人の要求による手伝いは農村の児童に多く、都市、特に山手

の児童では少なく、農村児童の勤労生活は都市児童に比べてきわめて一般的な生活内容である、②児童の要求による遊びは都市の児童に多く、農村の児童において著しく少なく、遊ばない児童が40%程度いる、③成人の要求による予習・復習は都市山の手児童に多く、農村児童、都市下町児童の順になり、読書については大きな差はないとその傾向を指摘した上で、児童生活の地域的特色については、農村児童の生活は勤労に特徴づけられ、都市山の手児童の生活は遊びと予習・復習に特徴づけられ、都市下町の児童の生活は遊びと手伝いに特徴づけられていると総括している¹⁴⁾。

なお、休日の生活についても同様の考察が加えられているが、「休日の生活内容を見ると、こゝでは登校、下校、学校生活を缺くだけで、他に著しい生活内容が加はるとは見られない。」¹⁵⁾ との基本的な認識を示している。

3) 生活内容の時間量

生活内容の一般性、どの程度の児童がその生活行動を行なったかに続いて、各々の生活内容にどの程度の時間を費やしたかが次に示されている。これは本稿2.(2)に示した調査研究目的のうち②生活内容の重要性・意味を各々の生活内容に用いられる時間量から明らかにしようとするものと理解される。この調査では図1. に示したような質問紙を用いて、該当する生活内容を行った場合30分刻みの回答欄に○をつけるという形式で調査を実施しているため、集計にあたっては30分の欄一つに○が付けられている場合は時間量15分、二つの場合はその間連続したものとして時間量30分、三つの場合は時間量1時間として算出している¹⁶⁾。その結果は次の表3. に示すようにまとめられている。

表3. 生活内容の時間量 (平日・行為者平均時間) (単位: 時間. 分)

	男女別		地域別			計
	男	女	農村	山手	下町	
睡眠	9.00	8.52	8.43	9.15	8.51	8.59
学校生活	7.10	7.52	8.26	6.29	6.43	7.22
遊び	1.42 (1.09)	1.14 (0.54)	1.14	1.38	1.31	1.29 (1.04)
映画	1.22 (0.03)	1.08 (0.01)	3.00	1.56	2.00	2.04 (0.02)
読書	0.51 (0.31)	0.44 (0.28)	0.46	0.50	0.47	0.48 (0.31)
予習・復習	(0.49)	(1.06)	1.13	1.30	2.21	1.26 (0.57)
手伝	1.24 (1.04)	1.29 (1.22)	1.39	1.30	1.05	1.06 (0.55)
ラジオ聴取	0.52 (0.24)	0.48 (0.21)	0.52	0.49	0.46	0.51 (0.23)
少年団行事	0.40 (0.02)	0.30 (0.01)	0.45	0.30	0.30	0.34

出典: 表1. と同じ、32～39頁から抽出・作表

注: 計欄の () 内は全調査回答者の総平均時間

表3. に示した生活内容ごとの平均時間量はその生活内容を行なった者の平均時間量であり、これで見ると睡眠と学校生活のほかは①映画、②遊び、③予習・復習、④手伝の順になっているが、調査回答者全員の総平均時間で見ると(男女別・計欄の () 内) ①遊び、②予習・復習、③手伝い、④読書の順となる。

男女別に見ると、女兒では学校生活時間が長く、睡眠時間がやや短い、学校生活時間が長い理由については「…（略）…授業時間が長いのではなく、学校に居残って生活する時間が女兒に多いこと…（略）…」を理由としてあげ、睡眠時間が短いことについては他の調査結果も参照して「…（略）…わが國兒童の一般の傾向と云つてよいやうである。」と説明している。地域別に生活内容の重さを見た場合は、農村の兒童では①勤労生活が最も重く、②遊びと予習・復習はこれに比べて軽く、③読書はことに軽いといえる、都市山手の兒童では①予習・復習が最も重く、②遊びがこれに次ぎ、③手伝いや読書は軽いといえる、都市下町兒童では①遊びと手伝いが最も重く、②予習・復習は重さが少ない、という傾向が見られることを示している。その上でさらに、①勤労生活が重い意味を持つ生活をしているのは農村兒童、ことにその女兒であり、②予習・復習が重い意味を持つ生活をしているのは都市山の手兒童、ことにその女兒であり、③遊びが重い意味を持つ生活をしているのは都市下町兒童、ことにその男兒であると総括している¹⁷⁾。

なお、休日の生活についても同様の考察が加えられているが、学校生活がないことから他に用いられる時間が長くなっており、そのなかでも遊びと手伝いに用いられる時間が著しく増加していると指摘している¹⁸⁾。

4) 時間的布置

第三に、生活内容が一日の生活の中で時間的な性格をもって布置されていることに注目して集計・分析している。ここでいわれる「生活内容の時間的布置」とは本稿2. (2) に示した調査研究目的のうち③について明らかにしようとするものであり、兒童がどのような時間帯にどのような生活行動をとっているかを明らかにしようという意味である。

はじめに、兒童の生活内容の中で食事・起床・就床のように一つの時刻的に規定された性格を持つものがあり、それらが「…（略）…兒童の生活を一定の時間的な構造の中にはめこんでゐる一つの標柱のやうな性質をもつてゐるのである。」¹⁹⁾として、平日の生活の時間的布置を規定する「標柱」として起床・朝食・登校・下校・夕食・就床の時刻を取りあげ、地域別・男女別・学年別に平均時刻を示している。これらの標柱による区切りの間にどの程度の時間があるか、さらに各々の時間帯に主にどのような生活内容が布置されているか平日については次のように全体的な傾向を示している。

起床と朝食との間：約1時間	遊びと手伝いで、ことに手伝いが多い
朝食と登校との間：約1時間	遊びと手伝いで、ことに手伝いが多い
下校と夕食との間：約3-4時間	遊びと予習・復習と手伝い
夕食と就床との間：約2-3時間	遊びと予習・復習と手伝い、ことに予習・復習が多い ²⁰⁾

これらの時間帯に各々の生活内容がどのような時間的関連をもって布置されているかについて、特徴的な兒童群について示している。地域別・男女別・学年別に見て特徴的な兒童群として、①「手傳の生活の最も重い意味をもつてゐる農村高等科

児童」の男児、②同じ意味を持つ「農村高等科児童」の女児、③「遊びの生活の濃い、下町初等四年男児」、④「豫習復習の生活の濃い山手女児」、⑤「比較的偏りの無い、種々な生活の平均して存してゐるとも云はれる農村四年の男児」の5例が取りあげられ、グラフとして示すとともに、その特徴が説明されているが、ここではその内①③④の3例のグラフを図2. 図3. 図4. として示す²¹⁾。

第五圖

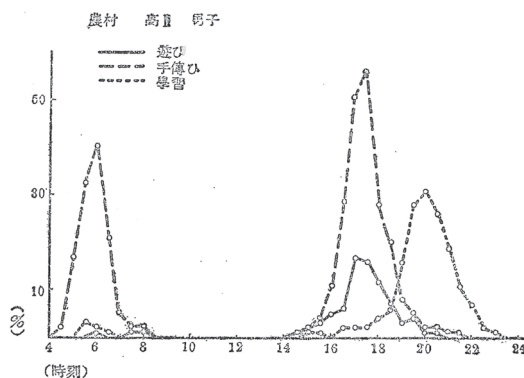


図2. 生活時間の布置 (その1. 平日・農村地域・高等科2年・男児)
出典：表1. と同じ、67頁

第七圖

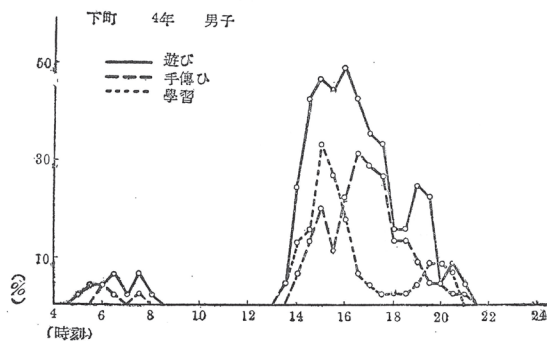


図3. 生活時間の布置 (その2. 平日・下町地域・初等4年・男児)
出典：表1. と同じ、68頁

第 八 圖

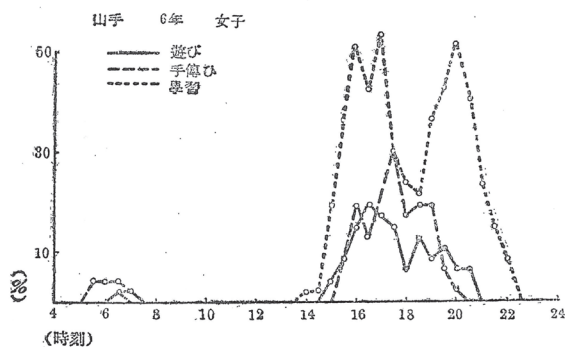


図 4. 生活時間の布置 (その 3. 平日・山手地域・初等 6 年・女兒)
出典：表 1. と同じ、69 頁

このような集計・分析をした上で、平日の場合「…(略)…児童は學校生活に規制されて、起床、朝食、登校の生活の時刻的に定つた生活を有つが、その間の生活内容の著しいものは農村児童のやうな勤勞の要求の多い地域の児童に手傳を見る位であつて、他にはさして著しいものは見ない云つてよい。児童の生活内容の如何が最も著しく現れて來るのは下校後と夕食の間で、その時間には手傳の多く課せられる児童は、その間を手傳に用ひ、豫習復習を多くする児童は、その間を豫習復習に多く用ひる。遊びの重い生活内容となつてゐる児童はこの時間に多く遊ぶのである。」²²⁾と総括している。

休日についても同様に集計・分析しているが、標柱となるのは起床・朝食・昼食・夕食・就床であり、それらの標柱を区切りとしてその間にどの程度の時間があるか、さらに各々の時間帯に主にどのような生活内容が布置されているかについて、次のように全体的な傾向を示している。

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| 起床と朝食との間：約 1 時間 | 手伝いを主とする |
| 朝食と昼食との間：約 5 時間 | 手伝いと遊びと予習・復習とが布置される |
| 昼食と夕食との間：約 6 時間 | 手伝いと遊びと予習・復習とが布置される |
| 夕食と就床との間：約 2 時間 | 予習・復習を主とする ²³⁾ |

さらに平日と同様に地域別・男女別・学年別に集計・分析し、特徴的な児童群についてグラフとして示しているが、その中で最も特徴的と考えられるのは農村地域の高等科児童において手伝いがきわめて多く行われていることである。これは男児と女兒に共通する傾向であるが、その中でも手伝いを行なつた児童の比率が高い女

第 十 一 圖

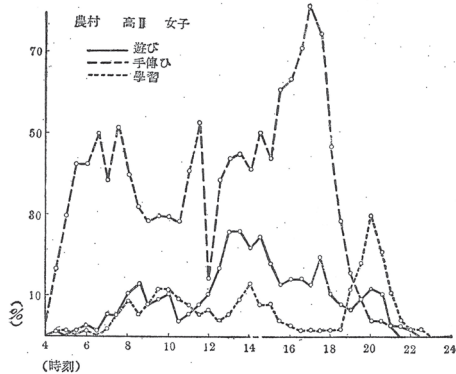


図 5. 生活時間の布置
(その 4. 休日・農村地域・高等科 2 年・女兒)
出典：表 1. と同じ、76 頁

児の例を図5. に示す。高等科児童の年代になると男児・女児とも家族の中で手伝いをするのが期待されていたのであり、それを通して不足する労働力を補うとともに、意識せざる形であったとしても「労働（家業、家事の両領域を含む）に関する社会化」が行なわれていたのである。ここに現代の子どもの生活、子どもの位置づけ、子どもへの期待とは異なる特徴が見られると判断される。

5) 児童生活の構造の概念

以上にその要点を示した調査結果について、調査研究者は「児童生活の構造の概観」として次のように総括している。

1. 児童の毎日の生活は一つの時間的な体系の下に営まれているが、その体系を決定する標柱となるものは時刻的に定まった性格を持つ起床・食事・登校・下校・就床である。
2. 標柱の間に布置される生活内容として手伝い・遊び・予習復習・読書・睡眠・学校生活がある。最も多くの時間を占めるものは睡眠と学校生活であり、その他で多くの時間を占めるものとしては手伝い・遊び・予習復習があり、読書がそれに次ぐが、これらに用いられる時間の総量は平日4時間、休日8時間程度である。
3. 生活内容は一方において児童の要求に基づき、他方で成人の児童に対する要求に基づいて営まれるのであり、各々の要求水準の高低によって児童の具体的な生活形態は異なってくる。年齢別・男女別・地域別、さらに平日と休日ではこの二つの要求水準に高低の差があり、それによって一日の生活形態が異なってくる。
 - 3-1. 年齢別に見ると、年齢によって成人の要求の高低が異なるため、高学年児童の生活では手伝いの比重が大きく、低学年児童の生活では遊びの比重が大きくなる。
 - 3-2. 男女別に見ると、女児に対して成人の要求が高いため手伝い、予習・復習の比重が大きくなり、男児では遊び、読書が多く見られる。
 - 3-3. 地域別に見ると、農村地域では成人の要求が最も高く手伝いが大きな比重を占め、都市山手地域では成人の要求に従って予習・復習が大きな比重を占め、都市下町地域では児童自らの要求による遊びが大きな比重を占める。
 - 3-4. 平日・休日別に見ると、休日は児童自らの要求による生活が平日に比べて高い比重を占める²⁴⁾。

このような差異があることから「従つてこの時間的布置を概観することは困難ではあるが、たゞそこに生活内容の交互的な単純な布置にある状態に於てわたくし達は、児童の生活の規則性の可能を見るのであつて、そこに生活内容の一般性、ならびに時間量と共に、児童の生活指導の問題が存してゐると云はなくてはならない。」²⁵⁾と

結論づけている。

3. 『児童生活の実態』の位置づけ

本論稿の基本的な研究目的である1940年代（昭和10年代後半～昭和20年代前半）の子どもを対象とする調査について明らかにするという点については、以上に紹介した内容によって明らかにすることができたものと判断する。

さらに、本研究で設定している3点の検討課題を中心として、次の各点を一応の結論として示すことができる。

1. 調査結果から1940年代における子ども、子どもの生活実態、子どもの置かれていた状況を明らかにするという第1の研究目的に関しては、生活の実態を生活時間という量的側面から明らかにすることができており、地域別・学年別・年齢別にどのような傾向があるかを集計・分析して示しており、十分にその目的を達成していると評価できる。
 - 1-1. 当時の子どもの生活行動の中で、睡眠や通学のような生理的・社会的必需時間のあり方は基本的に現代日本の子どもの生活と大きく異なっていない。また、自由時間の中で遊びや予習・復習が行われている点も現代日本の子どもの生活と大きく異なっていない。
 - 1-2. 当時の子どもの生活行動の中で現代日本の子どもの生活と大きく異なっている点として、手伝いが大きな比重を占めていた点を指摘することができる。また、現代日本の子どもの生活においては学校外学習・活動等が大きな比重を占めているが、これらの生活行動に関しては質問紙の見本の一部が示されている中で「学校以外のところで勉強をした」、「お稽古事をした（生花や琴など）」という選択肢が見られるが、調査結果を示す部分では触れられていない。これは調査者（報告書執筆者）の選択によると考えることもできるが、このような生活行動が当時の子どもの生活の中で大きな比重を占めていなかったために取りあげられなかったと推測することもできる。
2. 1940年代前半（昭和10年代後半）に実施された子ども調査の目的を明らかにするという第2の研究目的に関しては、子どもの生活実態を明らかにすることを直接的目的としており、それは達成されていると評価できる。
 - 2-1. 子どもの生活実態を明らかにすることが子どもの錬成のあり方を検討する基礎となるという目的がどの程度の比重を持ち、調査研究者がどの程度意識していたかという点に関しては、にわかには断定的な結論を示すことができず、さらに検討が必要である。
3. 1940年代前半（昭和10年代後半）の教育調査について実証的な検討を加えて、従来教育調査を実施することが困難で、調査結果が十分ないと理解されている時期における調査研究の実態を解明し、日本の教育調査の歴史の一時期に関して正当な理解を得るという第3の研究目的に関しては、科学的・実証的と認められる

調査が行なわれていたことの一例を示すことができた。

3-1. 子どもの生活行動を生活時間から把握するにあたって、そのあり方を規定する標柱を設定し、その間をどのような生活行動にあてているかという把握の方法、さらに子どもの生活行動の実態を成人からの要求と子ども自身の要求の働きかけ合いの結果としてとらえようとする把握の方法など、独自の方法論を設定し、それを実証に用いている点は科学的・実証的な調査と認める理由のひとつである。

以上の結論の中で検討すべき課題は、2-1. の調査研究の目的についてである。

本書を『日本児童問題文献選集』12として収録する際に解説を記した窪田暁子東京都立大学教授（刊行当時）は、この調査が行われた時期の子どもをめぐる校外生活指導・少年団、児童文化、学校などについての時代的・社会的状況と日本青少年教育研究所について説明した上で、「子どもの生活は、まさにその組織面からも、内容面からも強力に規制されてゆくことになった。」と把握しながらも、この調査報告そのものについては「そこには、先に述べた国防国家体制づくりのための研究といった方向は、所長による序文を除けば少しも現れてこない。」とし、著者を代表する青木誠四郎については「そこに、時流に積極的に逆らわないまでもどこか醒めていた研究者としての眼をみることができる。」と評価している²⁶⁾。

本書の「第一篇 児童生活の内容とその時間的布置 一 児童生活の実態」においては、この調査研究の直接的な目的は児童生活の縦、横の一面をとらえるだけではなく、「…（略）…外観的具体的な児童の生活そのもの、全貌を示すものを見よう…（略）…」とすることにあると説明されている。しかし、その上で「…（略）…かゝる生活実態を究めることは、児童の^(ママ)練成と云ふ教育の実際にとつていかなる寄與をなし得るであらうか。」という問題提起を行い、「殊に児童生活の^(ママ)練成に於ては、ある一つの生活活動を指導すると云ふのではなく、その全生活を練成することを意としなくてはならないのであるから、そこで、まづ明かにせられなくてはならないのは、この全生活の姿である。即ち練成はこの児童生活の全貌にまづ着眼し、その生活の正しい姿を形成することを意圖しなくてはならないのである。」²⁷⁾としている。また、調査報告にあたる部分においても、例えば生活内容の時間量について「…（略）…これ等の時間量は、児童の健全な發達から見て、望ましいものであるだらうか。」²⁸⁾、生活内容の時間的布置について「…（略）…わたくし達はまたどのような布置において児童生活の健かさを見ることができるだらうかの問題に遭遇する。」²⁹⁾、さらに結論にあたる「六 児童生活の構造の概観」の中で生活時間の枠組みを規定する意味を持つ標柱について、「これを児童の生活のこの意味での確立と云ふ事を考へるならば、その生活の規制は、この標柱の確立如何が第一の問題となると云はなくてはならない。」³⁰⁾と記しているように、各所に調査研究者が児童生活のあるべき姿を示そうとする姿勢や記述が散見される。こうした点から考えると、本調査研究の担当者が実践的志向を持っていたと判断することは可能である。また、子どもの生活実態を把握することが子どもの練成のあり方を考える基礎となると考えていたことも推測することは可能であるが、それがどの程度意識されていたのかについて判断

することは困難である。窪田暁子が指摘したように評価することができるのか、これまで各調査を検討する中で指摘してきたように、このような実践に寄与するという考え方が、調査者の本来の考え方であったのか、調査研究実施時の時代的・社会的状況の下でこのような研究機関の活動として実証的な調査研究を行うためにこのような姿勢を強調しなければならなかったのか、筆者にはにわかに判断することができない。

おわりに

以上、本稿においては1940年代前半（昭和10年代後半）の子ども調査を具体的に検討する第4の対象として『児童生活の実態』についての検討を加え、上述のような一応の結論を得た。この結論は本論考（2）（3）（4）で青木誠四郎『青少年社会生活の研究』、教育研究同志会『學童の生活調査』、東京府内政部社会教育課『少国民生活調査報告』について検討した結果と基本的に共通していると考えて、「おわりに」として示しておきたい。

1940年代前半（昭和10年代後半）に実施された個別の子ども調査について検討することは、本論考の研究計画では本稿で終わりとする予定である。これまでの個別の子ども調査についての検討をふまえて、上記の残された検討課題も含めて、この時期の子ども調査について総括することが次の課題である。

(2012年8月・稿)

【注】

- 1) 高島秀樹「第二次世界大戦下における日本の子ども調査—1940年代日本における子ども調査の研究（1）—」（『明星大学研究紀要—人文学部—』第39号、2003年、所収）81～82頁
- 2) 高島秀樹「第二次世界大戦下における青少年の余暇生活調査—1940年代日本における子ども調査の研究（2）—」（『明星大学研究紀要—人文学部—』第42号、2006年、所収）
高島秀樹「第二次世界大戦開戦期における子どもの生活調査—1940年代日本における子ども調査の研究（3）—」（『明星大学研究紀要—人文学部—』第44号、2008年、所収）
高島秀樹「第二次世界大戦下における子どもの生活調査—1940年代日本における子ども調査の研究（4）—」（『明星大学研究紀要—人文学部—』第46号、2010年、所収）
- 3) 日本青少年教育研究所『児童生活の実態』（日本青少年教育研究所 研究報告）1943（昭和18）年11月、256～257頁
- 4) 同上 256頁
- 5) 同上 序1～序2頁
- 6) 同上 目次1～目次2頁
- 7) 同上 1～2頁
- 8) 同上 3～4頁
- 9) 同上 4～5頁
- 10) 同上 5～6頁
- 11) 同上 9頁
なお、道徳性調査においては長野県の某山村国民学校2校と東京都にある国民学校2校の初等科1年から高等科2年の児童6,536名を対象としている。
- 12) 同上 7～9頁

- 13) 同上 10～11頁
- 14) 同上 16～17頁／17～18頁
- 15) 同上 23頁
- 16) 同上 31～37頁
- 17) 同上 36～40頁／42～43頁
- 18) 同上 53頁
- 19) 同上 60頁
- 20) 同上 65～66頁
- 21) 同上 66～70頁
- 22) 同上 71頁
- 23) 同上 75頁

初めの時間帯について原著では「朝食と起床との間」と記されているが、記載内容から「起床と朝食の間」と解して、ここではそのように扱った。

- 24) 同上 83～84頁
- 25) 同上 84～85頁
- 26) 窪田暁子「解説」（『児童生活の実態』児童問題史研究会監修 日本児童問題文献選集12、1983年、所収）6／8頁
- 27) 日本青少年教育研究所『児童生活の実態』2～4頁
- 28) 同上 58頁
- 29) 同上 81頁
- 30) 同上 83頁

【参考文献】

日本青少年教育研究所『児童生活の実態』（日本青少年教育研究所 研究報告）1943（昭和18）年11月、朝倉書店刊

窪田暁子「解説」（『児童生活の実態』児童問題史研究会監修 日本児童問題文献選集12、1983年、日本図書センター刊、所収）

*煩雑になることを避けるため、本稿作成にあたって参照した文献であっても、前4稿の「参考文献」に示した文献は全て記載を省略させていただいた。ご了解いただきたい。